

太宰治(だざい・おさむ)☆常設展示作家

1、太宰治の生涯

<生涯1 幼年時代―生家と母と> 0歳～6歳 1909～1915

のちの作家「太宰治」は、1909(明治 42)年6月 19 日、当時青森県内屈指の素封家であった金木村・津島家に生まれた。本名、津島修治。父源右衛門は、のち衆議院・貴族院議員を務めた。母タ子(たね)が病弱だったので、乳母、伯母キエに育てられた。2歳から6歳まで、『津軽』(昭和 19)のモデルとなった近村タケが子守をした。後年の<作家>太宰治を醸成したか、絵本や童話を聞いたり読んだりすることが好きな子供だった。

精神的な母親像の欠如は、太宰の人間形成に大きな影響を及ぼした。「津軽」執筆のため、昭和 19 年津軽地方の取材旅行中にタケの家に泊まった時、太宰はタケに叔母キエの実子ではないかと、真剣に詰問したという。

<生涯2 小中学校時代―作家への萌芽> 7歳～17歳 1916～1926

1916(大正5)年、金木第一尋常小学校へ入学。入学当初から秀才ぶりを発揮する。特に作文には個性的な才能を示し、高学年になると、既成の物語を改作・脚色する力や身の事件を真実らしく表現する力が顕著になる。

卒業後、学力補充のため、金木にある組合立明治高等小学校に一年間通った。ここでも観察力の鋭い細やかな表現力を見せる。

1923(大正 12)年、青森中学校入学後、本格的に文学に親しむようになった。井伏鱒二を知る。芥川龍之介、菊池寛、志賀直哉などの作品を読んだ。1925(大正 14)年、「校友会誌」に「最後の太閤」を発表し、創作に熱中していく。8月同人雑誌「星座」に参加、11月「蜃気楼」を編集発行、翌 15 年「青んぼ」創刊。

<生涯3 作家としての前期―不安と錯乱> 18歳～29歳 1927～1938

太宰の作家活動は、1933(昭和8)年処女作「思ひ出」から開始され、のち遺書として編まれた『晩年』(昭和 11)の収録作品が書かれている。旧制弘高入学頃から習作期・前期にかけて重大な事件が続発する。当時、弘高は社会主義活動の拠点校の一つで、太宰も左翼運動に傾倒し「無間奈落」「地主一代」「学生群」の

習作を生んだ。東京帝大入学後も資金援助などを続けるが、昭和7年生家の圧力で離脱する。この離脱は、のち作品に深く投影される裏切りの観念を形成した。二つには、小山初代との結婚問題(入籍はせず)の、分家除籍による打撃と絶望。最後に、この時期の4回もの自殺未遂。昭和5年心中の相手田部シメ子は死んでいる。昭和 10、11 年はパピナール中毒に陥り、前期は生活の危機に瀕した時期だった。

<生涯4 中期－花開く豊かな才能> 30 歳～36 歳 1939～1945

1938(昭和 13)年、井伏鱒二の仲介で山梨県甲府市の高等女学校教師石原美知子と見合いをし、14 年1月結婚した。破婚しないとの誓約書を書いたの上だった。9月、美知子とともに東京三鷹に転居。穏やかな生活が続いていく。

中期作品群を挙げると、14年「富嶽百景」「女生徒」、15年「駈込み訴へ」「走れメロス」、16年「新ハムレット」、17年「正義と微笑」、18年「右大臣実朝」、19年『津軽』、20年「新釈諸国噺」『お伽草紙』と、多くの傑作佳作が並ぶ。

中期の手法は実生活からかけ離れた題材を採り『お伽草紙』のようなく物語>性豊かな作品が目立つ。前期後期の作品世界と完全に異質なわけではないが、中期の太宰が志向したのは安定的なものだった。

<生涯5 後期－虚無と反俗> 37 歳～39 歳 1946～1948

太宰は疎開していた金木の生家で、妻子とともに敗戦を迎えた。当局に「花火」全文削除を命じられたなどの経験は、戦争時代を「実に悪い」「ひどい時代」と回顧させる。

その太宰に戦後は望ましい新時代とは映らなかった。戦争の終息とそれゆえの混乱・退廃は、知識人階層を中心に、俄か作りの民主主義・文化・小市民生活を生み出した。作家の精神は、似非(えせ)思想に絶望し、急速に反道徳・反俗と結びついていった。

昭和 22 年3月、山崎富栄を知り、「斜陽」のモデル太田静子から愛情が移る。23年6月、後期代表作「人間失格」連載開始。13日未明、富栄と共に玉川上水に入水。19日、遺体発見、奇しくも誕生日でもあった。享年 39 歳。

2、太宰治の代表作

○短編小説集『晩年』

1936(昭和11)年6月刊。第一創作集。昭和8年2月発表「列車」から11年4月「陰火」まで、習作期・前期の15短編である。収録順に挙げると、「葉」「思ひ出」「魚服記」「列車」「地球図」「猿ヶ島」「雀こ」「道化の華」「猿面冠者」「逆行」「彼は昔の彼ならず」「ロマネスク」「玩具」「陰火」「めくら草紙」となる。

この15短編には、自伝的な作品世界と物語性の強い小説を共に創りあげる、のちの太宰の才能が既に多彩に現れている。「逆行」は、第一回芥川賞候補作となった。

太宰は後年、<遺書>のつもりで編んだので「晩年」と名付けた、と述べている。本心は疑問であるが、「葉」は「死のうと思っていた。」、「逆行」は「老人ではなかった。(略)けれどもやはり老人であった。」と始まる。縊死未遂・非合法運動への関与・パビナル中毒・心中未遂と、実生活の作者は確かに危機が続いていた。

14年石原美知子と結婚し、安定した中期が訪れる。

○長編小説『津軽』

1944(昭和19)年11月、「新風土記叢書」の一冊として刊行。異色の<小説>とも言える紀行文風の作品である。この「叢書」の他作家の作品は小説仕立てではない。

「津軽」は、主人公「私」が、故郷<津軽>の人々と再会する物語である。特に<たけ>との場面は感動的で、人口に膾炙している。小説的構成・文学的完成度を疑問視する声もあるものの、亀井勝一郎・佐藤春夫らによって最高傑作と高い評価を与えられている。

太宰にとって、<故郷>は生家のみを意味したとも言われる。小山初代との結婚問題に端を発した、生家とりわけ長兄文治との確執は、故郷喪失とそれ故の故郷回帰の背反状況をもたらした。『津軽』執筆は取材旅行を含め、生家との和解状況、故郷意識の津軽<地方>への拡大を築いた、という大きな意味を持つ。

太宰文学は、破滅的傾向を指摘されるが、『津軽』はその傾向が小さい作品の一つとして重要である。

○翻案創作集『お伽草紙』

1945(昭和20)年10月刊。執筆開始は3月頃で、戦時下最後の作品。「前書き」と、民話をパロディ化して〈大人〉の小説に仕立てた四つの短篇「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」で構成されている。

四編それぞれに作品としての差異はあるものの、総じては〈物語作者〉太宰の豊かな才能が縦横に発揮されている。語り口の滑らかな自然さは、特筆されてよい。また「瘤取り」に〈性格の悲喜劇〉、「浦島さん」の〈年月〉と〈忘却〉に〈人間の救い〉をみるなど、人間心理に対する洞察は鋭いものがある。「舌切雀」の主人公は、生活力のない世捨て人として描かれており、太宰が投影される。この辺りから、芸術家の苦悩や権力への反抗を読み取る見方もできよう。

既に太宰は、「魚服記」(昭和8)「雀こ」(昭和10)など先行する作品を持つが、〈物語芸術〉としては全作品中最も優れた文学性を有している小説である。

○中編小説『人間失格』

1946(昭和23)年6・7・8月、雑誌連載で発表。23年7月単行本として刊行。自伝的系列作品の集大成、太宰文学の総決算。主人公「大庭葉蔵」は、同じ自伝的作品「道化の華」(昭和10年発表)の登場人物でもある。

葉蔵は投身心中しバアの女給のみ死亡、左翼運動への関与、自殺未遂、パピナル中毒、精神病院強制入院と、太宰本人の生き写しの半生を送って、〈人間、失格〉になりくただ、一さいは過ぎて行く〉だけとなる。他者に対する極度な不安と恐怖、社会や生活への不適格の観念は実存主義の文学の評価に堪える。『斜陽』(昭和22)と並び、数か国語で翻訳され海外の読者も数多い。また薬物使用で強制入院させられた時の小説化「HUMAN LOST」(昭和12)の、人間の資格を剥奪されたという観念とも関連している。

太宰が、連載一回目発表ののち投身したため、センセーショナルな話題となり、小説と実像が錯綜されて〈破滅型〉という作家の因ともなった。

3、太宰治のキーワード

〈キーワード1 汝を愛し、汝を憎む〉

『津軽』(昭和 19)にある、故郷に贈る太宰の言葉。1946(昭和 21)年3月、郷土の「金木文化会」発会式に出席し、機関紙「金木文化」第1号に同じ言葉を寄せる。

太宰の故郷意識には、生家の占める割合が大きい。大正 12 年、父の源右衛門の死後は、家長となった長兄文治が太宰にとっての〈生家〉でもあった。

昭和3年地主階級の告発「無間奈落」の発表、4年カルモチン服用事件、5年生家の一端を暴く「地主一代」の発表と続いて、非合法運動への関与と、すでに太宰は生家―長兄文治にとって、問題児及び対立者の様相を呈していた。特に小山初代との結婚が、長兄から分家除籍されるという、太宰にとって全く不如意の形と引き替えられたことは、深い衝撃を与えた。大成して見返す、という発憤をさせたにしても、複雑微妙な二律背反の心理状況を作った。

「撰ばれてあることの 恍惚と不安と 二つ我にあり」と同様、生と死を往還する文学創世の鍵となっていく。

＜キーワード2 生まれて、すみません＞

「二十世紀旗手」(昭和 12)のエピグラム。この小説はパビナール中毒と強制入院の所産なので、その頃に限定しての意味も大きい。太宰の文学の全容においても重要である。「二十世紀旗手」には、「罪、誕生の時刻に在り」の言葉もあり、〈罪〉の意識が見受けられる。

太宰の〈生命体・生活者〉としての存在意識が特異であることは、文学的出発が『晩年』であったことに象徴される。希薄な実存の観念は、強弱を見せながらも後期代表作『人間失格』まで、自伝系作品の基層となった。

この存在の希薄さが、地主階級に生まれたこと、非合法運動からの転向、心中で田部シメ子を死なせたこと、小山初代との離別などの事件と複雑に入り組み、聖書・キリスト教が媒体となって、罪の意識を作り上げた。

偽装自殺も説かれる昭和4年第1回目の弘高時代のカルモチン服用から、玉川上水の最後は実に5回目の自裁であった。生に謝罪するかのような〈生き方〉ではある。

＜キーワード3 無頼派(の文学)＞

太宰治は、文学史上〈無頼派(の文学)〉あるいは〈新戯作派〉と呼称されている。〈新戯作派〉は文学作品の方法、〈無頼派〉は作家の精神・生活態度

に注目した言い方である。作家集団がはっきりと限定されていないが、無頼派は、一応、織田作之助・坂口安吾・檀一雄・田中英光・石川淳・伊藤整らを指している。

太宰は、第二次世界大戦終結後の「パンドラの匣」(昭和 20)で、主人公に「私はリベルタンです。無頼派です」と宣言させる。この言葉は、現実の文学的流派の意識ではないが、呼称との関連はみられる。

戦後の混乱で、戦前戦時中の大観念に欺かれたと認識した民心、特に青年層が豊かな想像力に支えられた太宰らの、無頼的・反俗反社会的姿勢を熱狂的に支持した。

しかし、無頼派は単に戦後が生んだ一時的な現象ではない。戦前は傍流ではあったが、戦中戦後を通じて人間・社会に対する認識と文学方法は一貫していた。

4、太宰治のゆかりの場所

①太宰治の生まれ育った家

「斜陽館」(青森県北津軽郡金木町)

1907(明治 40)年、父源右衛門が、大地主津島家の威信をかけて新築完成した大邸宅であり、太宰はこの家で生まれた最初の子供であった。1923年、青森中学入学のため青森市の下宿先へ移るまで住んだ。一時は旅館になったが、平成10年4月、元の形に復元された。目の前に雲祥寺があり、文学碑のある芦野公園も近い。

②旧制高校生活を過ごした

弘前大学構内(旧制弘前高校)(青森県弘前市)

1927(昭和2)年4月～昭和5年3月、太宰は旧制官立弘前高校で学んだ。徒歩5分ほどの藤田家に下宿。この3年間にさまざまな出来事が起こる。芥川の自殺、小山初代との出会い、非合法運動への関与、昭和4年12月のカルモチン服用自殺未遂。創作面では「細胞文芸」の主宰。

旧制弘高講堂は大正 12 年に建設され、昭和 47 年に解体されたが、現在弘前大学文京キャンパス内に、太宰の文学碑や津島修治の名が刻まれた「旧制弘高在校生名簿」がある。

③中期への転機を図った

御坂峠の天下茶屋(山梨県南都留郡富士河口湖町)

1938(昭和 13)年9月、太宰は井伏鱒二の勧めで、天下茶屋に約2ヵ月滞在した。この間甲府の石原美知子と見合いをする。14 年9月、妻となった美知子と東京へ移るまで、甲府御崎町で新婚生活を送る。中期の名篇「富嶽百景」の舞台である。現在の茶屋は昭和 55 年に再建されたもので、太宰使用の道具も展示する。

旧道をはさんで向こう側の斜面に文学碑が建つ。

④太宰治が命を絶った

玉川上水(東京都三鷹市)

太宰が山崎富栄と入水心中した上水道。近くの井の頭公園と玉川上水の堤は、太宰の散歩道であった。三鷹駅から 500mほど下流の左岸あたりが、1948(昭和 23)年6月 13 日の入水場所と推定されている。遺体発見は、さらに約2km下流だった。三鷹駅の近く、禅林寺に太宰の墓がある。毎年6月 19 日、本堂で桜桃忌が行なわれる。

5、太宰治の関連人物

☆井伏鱒二(いぶせ・ますじ):文学の師

小説家。1896(明治 31)年～1993(平成5)年、広島県出身。『ジョン万次郎漂流記』(昭和 12)で直木賞受賞。他に「山椒魚」・「黒い雨」など。

1923(大正 12)年、青森中学一年の太宰は井伏の「幽閉」(大正 12)を読んで、<無名不遇の天才>として敬慕する。弘前高校入学後、原稿依頼し、井伏は「細胞文芸」第4号(昭和3)に「薬局室挿話」を寄せた。

1930(昭和5)年の5月中旬、太宰は初めて井伏に会うことができ、以後生涯師と仰ぐ。石原美知子との結婚、パピナル中毒入院の最終説得など、文学上を超えて日常生活全般、太宰は井伏の庇護の下にあった。

太宰に関する井伏の文章は、『太宰治』(平成元)にまとめられた。

☆近村タケ(ちかむら・たけ):幼少期の子守

1896(明治31)年、金木村津島家の小作人の娘に生まれる。1911(明治45)年4月から、幼少太宰の子守を主な仕事として、津島家に奉公する。1917(大正6)年、タケが太宰の叔母キエの女中となって、金木を離れるまで養育した。タケは太宰を「修ちゃ」と呼び、昼間はいつも一緒に過ごした。

タケは人物設定に多少の変化を見せながら「思ひ出」(昭和8)「黄金風景」(昭和14)「新樹の言葉」(昭和14)に描かれたのち、小説『津軽』(昭和19)で、感動的な再会の名場面の「たけ」として形象化される。叔母キエとともに、太宰の〈母意識〉の原像となった。タケが嫁した小泊に建設された「小説『津軽』の像記念館」に「運動会」でのたけと太宰の銅像が建っている。

☆檀 一雄(だん・かずお):作家仲間

小説家。1912(明治45)～1976(昭和51)。山梨県出身。「真説石川五右衛門」(昭和25～26)連載中に直木賞受賞。他に『リツ子・その愛』『リツ子・その死』『火宅の人』など。

檀は小学1年時、両親と離れて母方の実家で養育された。大正10年母が出奔、13年離婚。太宰と形・質の差異があるが、母と故郷の〈喪失〉という似た境遇を持っている。

1933(昭和8)年11月頃から交友し始め、9年太宰らの「青い花」創刊に参加、11年頃は太宰と一体といえる異常な生活だった。11月、檀が「走れメロス」(昭和15年)の原体験という〈熱海事件〉が起こった。

檀には『小説太宰治』(昭和24)、『太宰と安吾』(昭和43)がある。

☆山崎富栄(やまざき・とみえ):心中の相手

1919(大正8)年～1948(昭和23)年、東京都出身。太宰と玉川上水に投身心中し、死を共にした女性。昭和19年、奥名修一と結婚直後、修一がマニラに転勤、のち消息不明。

22年3月頃、太宰と知り合い、急速に関係を深めた。この頃、太宰は『斜陽』の材料となった日記の提供者、太田静子とも親しい間で、静子の懐妊を知っていた。同22年秋頃から、太宰は富栄の部屋で仕事をしていた。その部屋で静子の子の認知がなされたことは、静子懐妊を知らなかった富栄に大きな衝撃を与えた。

富栄は、既に22年7月父親宛、太宰と死ぬつもり旨認(したた)めてもおり、23年6月13日入水。

二人の死後、太宰の才能を惜しむあまり、一時<富栄による無理心中説>が取り沙汰された。

6、太宰治の資料紹介

○蔵に収めず

書画(短冊)

365mm×61mm

「蔵に収めず」。「マタイ伝七章」に「空を飛ぶ鳥を見よ 播かず刈らず 蔵に収めず」とあり、太宰の自由世界へのあこがれを示すことば。作品「パンドラの匣」に見える。

○常人の恋ふといふよりはあまりにて我は死ぬべくなりにはたらずや

書画(歌軸)

1,002mm×265mm

「常人の恋ふといふよりはあまりにて我は死ぬべくなりにはたらずや」の和歌に「録万葉句」の詞書がある。太宰は亡くなる頃、よくこの歌を書いた。

○「お伽草紙」

原稿

1945(昭和20)年

262mm×195mm(×30枚)

『お伽草紙』は昭和 20 年 10 月に筑摩書房から刊行された作品であるが、そのうちの「前書き」と「瘤取り」の部分。あるいは雑誌社に送るために書かれたものか。

○「人間失格」

原稿

1948(昭和 23)年

250mm×180mm(×4枚)

昭和 23 年 6 月から「展望」に 3 回連載され、没後刊行された『人間失格』の草稿類。友人中村貞次郎旧蔵、一部新谷博氏寄贈。

○久保隆一郎宛書簡(昭和 9 年 9 月 13 日付)

書簡

1934(昭和 9)年 9 月

143mm×230mm

児童文学者で、太宰治らと同人誌「青い花」に参加した久保隆一郎(ペンネーム喬)にあてたもの。「歴史的な文学運動をしたい…ぜひとも文学史に残る運動をします」と「青い花」創刊にむけての意気込みを述べている。

7、太宰治年譜

1909(明治 42)年…6月 19 日、青森県北津軽郡金木村大字金木字朝日山 414 番地に生まれる。戸籍名、津島修治。2 歳～6 歳まで子守の近村タケに養育される。

1916(大正 5)年…金木第一尋常小学校に入学。

1922(大正 11)年…小学校卒業。組合立明治高等小学校に入学。

1923(大正 12)年…父、源右衛門死去。県立青森中学校に入学。

1925(大正 14)年…3 月、「校友会誌」に最初の創作「最後の太閤」を発表。この頃から作家への憧れが芽生える。8 月、級友と同人雑誌「星座」を創刊するが、1 号で廃刊。11 月、同人雑誌「蜃気楼」創

刊、編集にあたる。

1926(大正 15)年…同人雑誌「青んぼ」創刊。

1927(昭和2)年…中学校4年修了。官立弘前高等学校文科甲類入学。7月、芥川龍之介の自殺に衝撃を受け、以降、学業停滞。9月頃、小山初代を知る。

1928(昭和3)年…5月、「細胞文芸」創刊、「無間奈落」連載。

1929(昭和4)年…12月、カルモチンを多量に服用、自殺未遂。

1930(昭和5)年…1月、県文芸総合誌「座標」創刊号に「地主一代」連載開始(生家の圧力で未完)。4月、東京帝大仏文科に入学。5月、共産党のシンパ活動に加わる。井伏鱒二に師事。7月、「座標」に「学生群」連載(未完)。11月、銀座のカフェの女給田部シメ子(あつみ)と鎌倉七里ヶ浜で薬物心中。シメ子のみ死ぬ。12月、小山初代と仮祝言。

1931(昭和6)年…共産党へのアジト提供、資金援助と支援活発。

1932(昭和7)年…7月、青森警察署に、続いて12月、青森検事局に出頭し、社会主義運動から離脱した。

1933(昭和8)年…同人誌「海豹」に参加、2月「海豹通信」に初めて<太宰治>の筆名で作品発表。

1934(昭和9)年…檀一雄らと「青い花」創刊。のち、保田与重郎らの「日本浪漫派」に合流する。

1935(昭和10)年…大学卒業絶望。都新聞社の就職試験も失敗、鎌倉山で縊死未遂。4月、急性盲腸炎で手術、腹膜炎を併発重態。入院中パピナール習慣化。

1936(昭和11)年…パピナール中毒に陥る。6月、第一創作集『晩年』刊行。10月、中毒症で武蔵野病院に入院。

1937(昭和12)年…3月、初代と水上温泉で心中未遂、6月離別。

1938(昭和13)年…9月、井伏鱒二同伴で甲府市へ赴き、石原美知子と見合い、11月婚約。甲府へ転居。

1939(昭和14)年…結婚。9月、東京三鷹村に転居。

1941(昭和16)年…6月、長女園子誕生。8月、生母夕子(タネ)の見舞で十年ぶりに帰郷する。

1942(昭和17)年…10月、「花火」が当局から全文削除された。(戦後21年11

月「日の出前」と改題、発表。)

1944(昭和 19)年…「津軽」執筆のため、5月 12 日から6月5日まで津軽地方を旅行。

11 月刊行。

9月、「佳日」の映画化「四つの結婚」封切となる。

7月、中国青島で小山初代、死去。

1945(昭和 20)年…4月、甲府の石原家に疎開。

7月、金木の生家に再疎開。15 日終戦。

1946(昭和 21)年…11 月、東京へ。

1947(昭和 22)年…2月、太田静子の叔父経営の神奈川県雄山荘に静子と滞在、「斜陽日記」を借りる。

3月、山崎富栄を知る。11 月、静子に女兒(治子)誕生。太宰喀血。

12 月、『斜陽』刊行。

1948(昭和 23)年…2月、「春の枯葉」を俳優座創作劇研究会が上演。

6月、「人間失格」第一回分を発表。13 日深夜、山崎富栄と玉川上水に入水。14 日、遺書と「グッド・バイ」の校正刷・草稿を発見。19 日、遺体発見。兩人とも死去。享年 39 歳。